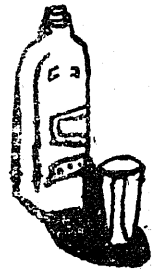


# 子どもの怪我の

## 応急手当

平井信義



子供の怪我は日にまことに多いものであります。夜、寝巻に着替へさせようと裸にしてみると、あざや、すり傷が手足に沢山できているのに驚くことがあります。殊に活動のはげしい子供にいちじるしいことです。

大きい怪我で生命を奪われる子供は、一才、二才と年を追うにつれて、次第に多くなります。そして五才では死亡の第一の原因となります。乗物にひかれた、川にはまつた、高みから落ちた、やけど——こうして一才〜五才の幼児は約七千人も死んでいます。

子供は自分から災害を予防する力は非常に少い。ですから、子供と共に暮し、子供の世話をしている者は、予防に万全の策を立てなければなりません。

今日は、家庭内又は幼稚園で起る小さな事故を主としてかんたんな処置をお話ししましょう。

### (1) 刺傷・切傷

傷の中にトゲや砂などが入つているときは、それを完全に出さないと化膿します。化膿するとあとが面倒です。焼くかアルコールで消毒した針で傷口をひろくしてつまみ出すか掻き出すのがよいでしょう。

傷口が小さくて奥の深い傷は、目にはごみが見えなくとも、細菌が入つていることが多いから、傷口をひろくしておくことは大切です。

傷口がひろくなつたら、こんどは消毒です。先ずオキシフルで泡立たせて、中の細かいごみを出しましょう。あとは、赤チンキを塗って消毒したガーゼを当てて縛帯するか、ばんそう膏でとめておけばよいのです。

但し傷口はばい菌が繁殖し易いから、折角消毒しても、あとをよごすことのない様、水につけない様にしておかないといけません。傷口を外界と遮断するのです。

傷口をなめるのは、口の中に沢山のばい菌がいることを思えば、よいか悪いか答えはかんたんです。たもとくそについても御判断願

います。

## (2) 打撲傷と血腫

あざ、こぶの類です。之は外からの力が伺いたため、皮ふの内側の血管が破れ血が組織の方に溢れ出たが、外側の皮ふが破れないので外に出ることが出来ないでいる姿です。

あふれ出た血液を早く吸収させればよいのです。ふつう湿布をいれます。湿布の液は硼酸水、リパノール水など何でも結構です。冷湿布にします。

こぶなどは打つた日より次の日あたりにはれがひどいことがあります。又、おでこのこぶはその後まぶたの方に下つて来てむくんだ様な顔になることは知つていきましょう。心配はいりません。

但し、打つた場処が次々とあざになる子供が時にありますが、之は血液の病気がありますから、医者について検査してもらつておす、めましよう。

## (3) 捻挫・脱臼・骨折

捻挫は外力によつて関節についている筋の一部が裂けることです。足の関節に多いことは、すでに「ふみちが」として経験されているでしょう。その他肘も強くなじられて捻挫が起ります。内出血をしたり腫れることも多くあります。

何よりも安静が大切です。そして冷湿布を行います。あまり痛みが強いとき、長くつゞくときは骨にひびが入つて居ることがありますから、レントゲンの必要があります。

長く関節を使わないと動く範囲が少く固つてしまいますから、痛みが少くなつたら積極的に動かすことをしましょう。その時期は医

者にきくことが大切です。

脱臼は、関節で接している二つの骨がはずれて喰いちがうことであります。肩や肘の他、あまり大きな口をあいて笑つと顎がはずれます。

一度はずれると習慣になつてしまうものもあります。折角先生がお手を引いてかけ出そうと引張るとすぐに肘がはずれてしまう子供がそれです。あくび(欠伸)をしただけで顎がはずれる先生もおいでです。

はずれたものは、少しでも動かすと大変痛みます。とてもさわれません。放つておくと腫れて来たりします。

整復しなければなりません。が専門家に頼みましょう。整復の要はずれるときに通つた道を又戻すのです。引くとき相当にいたいものです。

脱臼も骨折も、その場処を出来るだけ動かさない様にして専門家を訪ふことです。動かさない様にするには支えが必要です。副木があればよいが、杖でも板でもよく、それをあて、傷の上下二つの関節がうごかない様にしぼります。

## (4) 火傷「やけど」

火傷で不幸な思いをしている子供は実に多いのは悲しいことです。一にも親の不注意、二にも親の不注意から起ります。

すぐに油をつけましょう。お湯のか、つた場所に衣服がついていたら、すぐに引裂きましょう。その際、皮ふをこすつたり水泡をつぶし取ることがない様、油は亜麻仁油、硼酸軟膏、オレーフ油、肝油——何でもよいが、タンニン酸の入つた軟膏は非常に効果があります。梅干を厚く塗つてその上に冷湿布する民間療法もあります。

水疱があれば、その表面に消毒薬を塗つて消毒した針で刺しますと、水が出てしほみます。その上に皮をいたぬぬようにして軟膏をはればよいのです。

やけどにばい菌がついたら、それこそ大変です。破れたりむけたりした傷にはよくよく消毒に注意いたしましょう。

然し転ばぬ先の村——やけどはさせないことです。私の経験した火傷の場面を並べて御参考に供しましょう。ストーブの側で遊んでいて、上にのつた薬罐をひっくり返した。洗面器に入れた熱湯の中にはまり込んだ。廊下の曲り角で藥罐をもつた人とぶつかった。いろりに落ちた。あつい風呂に足をふみ入れた——活動がさかんで落付きないう子供たちが最も陥入り易い災害です。

### (5) 墜落

火傷と同様に多い事件です。もの干台から落ちた。二階から転り落ちた、木の枝が折れた——ということ年で年に四・五百名の子供が死んでいます。私共の病院でも、しよつ中かつき込まれます。脳出血でもあるようなら、安静第一、騒いだりゆり動かしてはなりません。意識がありません。耳や鼻から出血していれば極めて重体です。頭蓋底骨折といって、大切な脊すいや脳神経の出ている部分であるからです。

内臓に傷が出来ることがあります。之らは時間を追つて次第に症候を表わして来ます。吐いたりおなかを痛がつたりします。尿の検査などをしてみることもあります。

脳振盪——これも意識を失います。脳に一時血行の障碍が起るためと考えられています。頭を低くして静かにねかせ、からだを温かくつみ、からし泥をふくらはぎにはりつけるとよいでしょう。そ

の他は医師にまかせますが、呼吸がよくないときは人工呼吸を忘れてはなりません。

傷があれば、傷の手当をします。

### (6) 貧血

今まで元気だつた子供が、立つている中に顔色が青くなり、気持が悪いといふ、遂にたおれるときは、脳貧血を考えるべきでしよう。

頭を低くして寝かせ、胸腹をきつくしめていける部分はゆるめます。恐ろしい病気ではありません。アルコール飲料をのませるのもよいことです。間もなく恢復します。くせを持ち易いものです。

### (7) 鼻血

子供を静かにねかせ、特に頭を高くします。鼻孔にはきれいな綿を小指の先程に丸めて深く入れます。そして鼻のつけ根を冷やすとよいでしょう。

又、椅子に坐らせ、小鼻から鼻の中隔に向けて指で強く圧迫させるのも一方法です。室がむしむししていたら、通風をよくすることも忘れぬよう。

### (8) 耳にものが入つたとき

子供は小さな豆、卸などを耳に入れることがあります。又は虫が飛び込むことがあります。

そんなときピンセットなどで取らぬこと。豆などははじき入れる恐れがありますし、耳を傷付けます。先の曲つたものでそつとかき

出す様にしますが、医者にまかせた方が安全です。

虫などは油を流し込めば出て来ます。強い光(電灯)の方に耳の孔を向けるのも方法です。

(9) 鼻にもものを入れて取れないとき

先ず口をつぐんで自分で鼻からふき出させること。それで出なければ医者にまかせた方が安心です。取れそうな気がしていじつている中に、鼻の粘膜を傷付けたり、次第にふやけて来てとり難くなります。

(10) 目にごみが入ったとき

決してこすつてはいけないことを言いきかせましょう。まぶたをひっくり返して、ごみをきれいな布でふきとります。目をひっくり返すことが困難なら矢張医者にいきましよう。涙とともに出て来ることもしばしばありますが、粘膜にくい込んでいることもありまう外からこすると目のレンズに傷が付きまう。

(11) のどにもものがつかえたとき

口に入れていたもの(玩具、メタルなど)が奥にはまつたときはすぐに前屈みにして背中を平手で強くお打ちなさい。或いはかんじよりを鼻に入れてくさみをさせてみまう。

小骨とかとげの類であれば、口をあけさせて外から見ればピンセットを使いまう。見えぬときは握り飯や芋類をのみ込ませるのがよいが、子供ではなかなか困難なことが多いから、つかえてる感じがあれば医者に見てもらいまう。そのまゝにしておいて、さゝつた場処から化膿して大変なこゝになつた例があらまう。

異物が気管に落ち込んだら大変です。生命にかゝります。そのときは激しい咳が出るのでわかりまうが、咳のあとけろりとしていても危険です。耳鼻咽喉科の医者に見てもらいまう。

(12) かまれたとき

犬や蛇にかまれたとき、恐ろしいのは毒やばい菌をからだにもらうこゝです。

犬で問題になるのは狂犬病ですが、これは咬まれた傷の様子ではわからないから、犬が狂犬かどうかをすぐに検査してもらうこゝです。といつて決るまで傷を放つておくのは悪いから、あやしいときは傷の部分より心臓に近いところをきつくしばり、傷口を絞つて出血させまう。そのあと千倍の昇汞水で洗い、一〇%苛性カリ液をぬつて腐蝕させまう。狂犬と決れば注射を開始しなくてはなりまう。注射は十八日もかゝります。

蛇にかまれたら、傷口から毒を吸い出し、同じく心臓部に近い方をしばつて毒が全身に廻らぬ様にしまう。あとは医者にまかせて下さい。

× × ×

以上で応急処置についてお話ししましたが、何よりも大切なことは落着きでありまう。突然に起つた事件が多いから、慌て、逆なこゝをしようしている場合をしばしば見受けまう。急救処置が上手にいくかないか、あとの経過がしばしば変つて来まうから、どうか心の落着きをもつて下さい。

(愛育会所員、お茶の水女子大学講師)